

# NEWS LETTER

## No.65

2010 Sep.

日本がん予防学会 Japanese Association for Cancer Prevention(JACP)

### CONTENTS

- 01 第17回日本がん予防学会を主催して  
(浅香 正博)
- 02 Breakthrough は辺境から  
(楢村 春彦)
- 03 葉酸接種と Fluorouracil 系抗癌剤治療後の進行胃がんの予後  
(松尾恵太郎)
- 03 トロン  
(秋葉 澄伯)
- 04 日本多施設共同コホート研究 (J-MICC Study ジェイミックスタディ) に参加して  
(田中恵太郎)
- 04 果物・野菜接種の生体指標と乳がんリスクについて  
(栗木 清典)
- 05 イソフラボン摂取と乳がんリスクとの関連：症例対照研究における量反応関係の検討  
(岩崎 基)
- 06 COST OF CANCER  
(濃沼 信夫)
- 07 平成 22 年日本がん予防学会評議員会議事要旨
- 08 編集後記

## 第17回日本がん予防学会 を主催して



浅香 正博

北海道大学大学院消化器内科学

第17回日本がん予防学会は、がん予防学術大会 2010 札幌の一環として、第33回日本がん疫学研究会および第11回日本がん分子疫学研究会（いずれも会長は、札幌医科大学公衆衛生学講座森満教授）とともに、2010年7月15日と16日の2日間にわたって札幌市の北海道大学学术交流会館で開催されました。メインテーマは、“がんの予防：基礎・臨床・疫学の垣根を越えて”にさせていただきました。北海道大学構内の緑あふれる雰囲気の中、200名を超える参加者があり、各セッションで充実した発表と熱い議論がな

されました。

開会式のあとすぐにシンポジウム“胃癌予防の最前線”が開始になり、基礎・臨床・疫学の垣根を越えた最新の発表と熱い討論が行われました。またこの日のランチョンセミナーでは国立国際医療研究センター国府台病院院長の上村直実先生がピロリ菌の除菌と胃癌予防の総説講演を行ってくれたので、この日半日の参加で胃癌予防の充実した知識が得られたと思います。招請講演では東京大学先端科学技術センターの赤座英之教授の前立腺癌の予防について最新の知見を教えてください



会場入り口



ポスター会場



受付

ました。この講演を聞いて大豆製品特に豆腐を毎日食べようと思った方が増えたのは間違いないと思います。午後からは日本学士院幹事の杉村隆先生からがん予防の重要性というテーマで特

別講演をしていただきました。貴重なスライドを何枚も見せていただき感動しました。また、杉村先生が新しい知識の取得にどん欲で常に積極的に前を向かれて歩まれているのに感心しました。この日は、女性ホルモン依存性のがんの要因に関するシンポジウムも開かれ、活発な討論がなされました。16日は、身近な環境発癌：ナノ粒子のシンポジウムが行われました。アスベスト発癌以外にも発癌の可能性があるナノ粒子がいくつもあるという発表は、会員の方々に相当衝撃を与えたのではないのでしょうか。

指名講演では、札幌がんセミナーの

小林博先生がライフワークと言うべきスリランカの子供たちへのがん予防の啓発活動が紹介され、会員に大きな感銘を与えました。ワークショップ“米由来のがん予防作用”では、白米に精米される前の物質の発がんに対する効果が発表され、終了時間を大幅に延長するくらい熱心な討論がなされました。ポスター発表は55演題であり、若手の研究者を中心に熱心な討論がなされていました。

最後に本学会の開催に協力してくださった多くの方々に深謝し、日本がん予防学会のますますの発展を心より祈念いたします。

## Breakthroughは辺境から



相村 春彦

浜松医科大学病理学第一講座

病理医はものを捨てられない。ちょっと変だとおもったスライドガラスやパラフィンブロックや文献などどんどんたまっていく。昨今はいざ知らず、スライドガラスをとっておいても、つぎに同様の経験をするのが一生の内におこるかかわからないし、なにかできるわけではないのに、ただただたまっていく。わたしの部屋には、急逝した前教授の36mmスライドなどが山とあり、まったく捨てられない。わたしが一生のあいだに出会うことのないような蘊蓄ある症例かもしれないし…。そのなかで、Yamagiwa KatsuzaburoのCollected papersがでてきた。1915年に発表した論文の50周年を記念して1965年に出版されている。前教授は1932年生まれだから、相当気合いがはいっているころ購入したに違いない。

このニュースレターの読者は、直系ともいえるようなお仕事をしておられるかたも多く、いまさらなのであるが、

塗ったtarについては、いろいろ検討して外国からとりよせたものをつかったので成功したらしいなどと、教室の先輩である榎本先生（前教授よりさらに上の世代）が言っておられたのを思い出し、ほとんど読めないドイツ語をたどってみた。それまでの種々の方法を詳細に検討、記載しており、Gaswork tarとそこだけかっこ書きで英語で記してある引用文献があった。で、その引用文献Lancet 1912, Dec 7をとりよせてみておどろいたのはその住所である。“Robben island, Cape colony”。先頃ワールドカップがおこなわれた南アフリカ（当時英領）で、首都ケープタウンから7kmくらいの湾の中の島である。Wikipediaというのは便利なもので、マ

ンデラ氏が幽閉されていたことなどいろいろと書いてある。

アフリカ大陸の最南端と、ユーラシア大陸の端っこで行われたbreakthroughであったのである。考えてみるとピロリ菌の発見だってかなり辺境で、（病院病理医という職種も科学者としては辺境といえるかもしれない）なされている。今後とも世界や日本の辺境で、創造的仕事ができるだけの状況が続いてほしいと思う。

1. Bayon: Epithelial proliferation induced by Gaswork Tar. The Lancet 1912.
2. <http://ja.wikipedia.org/wiki/ロベン島>

Robben\_island\_from\_table\_mountain.jpg（下図）



## 葉酸摂取とFluorouracil系抗がん剤治療後の進行胃がんの予後



松尾 恵太郎  
疫学・予防部

愛知県がんセンター研究所

近年、葉酸摂取量や葉酸代謝酵素の遺伝子多型が、各種のがん罹患リスクと関連することが疫学的に示されている。また、5-FUやMethotrexateなどの葉酸代謝関連経路を標的とする抗がん剤は、臨床上重要な役割を果たしている。これらの事実は、葉酸代謝経路が、がん罹患・治療予後の何れにも影響を与えうる重要な代謝経路であることを示している。しかしながら、葉酸摂取量の臨床予後に及ぼす影響に関する検討は殆どなされていない。本稿では、愛知県がんセンターでの研究成果を紹介する。

愛知県がんセンターの大規模病院疫学研究システムを用いて、術前葉酸摂取量、葉酸代謝関連遺伝子多型MTHFR C677T、TYMS 3'-UTR 6bp ins/delの、Fluorouracil系抗がん剤治療を受けた進行胃がん患者（n = 132）の予後への影響を検討した。主要評価項目は、全生存率と定義した。術前葉酸摂取量は食物摂取頻度調査票により推定し、遺伝子型はTaqMan法により決定した。評価項目の予後への影響

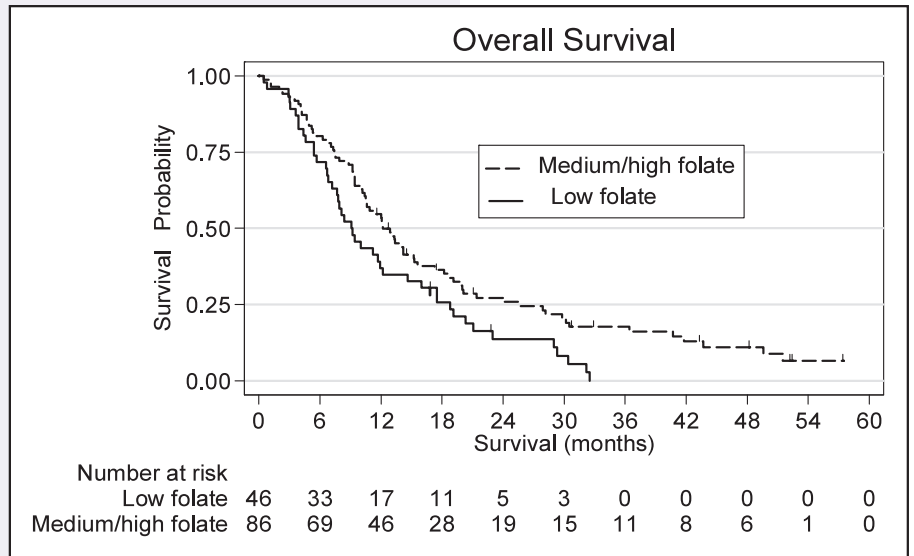
は、Kaplan-Meier法並びに多変量比例ハザードモデルにより検討した。多変量解析では、臨床病期等、既知の予後要因を全て補正した。

葉酸摂取量の3分位で低摂取群（<260 $\mu$ g/日）は、その他の群に比べて統計学的有意に生存率が低かった（p = 0.03、図）。低摂取群に対する中・多量摂取群の多変量解析でのハザード

比は0.65（95%信頼区間：0.44 - 0.96）で、既知の予後要因の影響を除外しても摂取量が多い患者群が良好な予後であることが示された。遺伝子多型では、MTHFR 677TT遺伝子型、TYMS +6bp/+6bp型が統計学的に予後良好であった。遺伝子多型と葉酸摂取の間に組合せによる増強作用は明らかで無かった。

葉酸摂取が多い人の方がFluorouracil系抗がん剤で治療される進行胃がん後の予後が良好であることが示された。詳細はShitara K et al. Cancer Epidemiol Biomark Prev 2010を参照されたい。

臨床的要因以外の因子の臨床予後に対する影響評価は、欧米では徐々に実施されているが日本では殆ど実施されていない。今後必要な研究課題であると考えられる。



## トロン



秋葉 澄伯

鹿児島大学大学院医学総合研究科  
健康科学専攻人間環境学講座 疫学・予防医学

以前、この欄でラドンについて紹介しました。我々は大地や宇宙からの自

然放射線に曝露されていますが、自然放射線による人間の被ばくの約2分の

1がラドンによるものです。最近ではラドンとともに注目されているのがトロンです。これもラドンと同様に放射性の不活性ガスですがラドンの半減期が3.82日であるのにトロンは56秒にすぎません。従って、室内にトロンが侵入してきても直ぐにトロンが崩壊して生成される核種（トロン娘）になってしまいます。トロン娘が注目されているのは二つの理由によります。一つは、これまでの疫学調査の少なくとも一部でラドンの測定に際に間違っ

まで測定していた可能性があることで。実際、米国がん研究所と中国の国立放射線防護研究所が共同でおこなった肺がんの症例対照研究ではラドン測定でそのような間違いが起きた可能性が強いことが日本やドイツの研究者から指摘されています。注目されているもう一つの理由は、トロン娘の肺に与

える影響がこれまで考えられていた以上に大きく、タバコの煙や粉じんに付着したトロン娘が肺の奥まで侵入して、末梢の肺がんのリスクを高める可能性が指摘されているためです。トロンの研究分野では放射線医学総合研究所の床次博士が世界をリードしています。最近、千葉で放射線医学総合研究

所の主催で国際ワークショップが開かれ、国内から20名、海外から50名の研究者が参加して熱心な議論が行われました。発表された論文は2名のPeer reviewを経てOxford PressのRadiation Protection Dosimetry Special Issueとして刊行されます。

## 日本多施設共同コホート研究(J-MICC Studyジェイミックスタディ)に参加して



田中 恵太郎

佐賀大学医学部社会医学講座予防医学分野

J-MICC Studyは、文部科学省科学研究費などの補助を受けて、全国の大学・研究機関が共同して約10万人の対象者を20年間にわたって追跡し、生活習慣と遺伝的素因(遺伝子型)ががんなどの生活習慣病の発生に与える影響を検討する事を目的としている。J-MICC Studyの主任研究者は、平成22年5月までは名古屋大学予防医学浜島信之教授が担当し、以後は愛知県がんセンター疫学・予防部 田中英夫部長へと引き継がれた。私共は、佐賀

市において2005年11月から2007年12月にかけてベースライン調査を実施し、12,078名の研究協力者を得て、現在追跡調査を実施中である(J. Epidemiol., 20: 40-45, 2010)。今年度からは5年後の第二次調査を開始する予定である。近年、幾つかの疾病について大規模なGWASが行われてきたが、発見された遺伝子多型との関連は必ずしも強いものではなく(多くの場合オッズ比は1.5未満)、逆に環境要因の重要性が再認識されてきたのではな

いだろうか? 今や、遺伝子解析よりも、従来から直面している環境要因(食事要因など)をいかに正確に把握するかという問題の方がはるかに困難な様に思われる。生活習慣要因と遺伝要因の両者を検討しており、遺伝子環境交互作用の検討が可能なJ-MICC Studyが果たす役割は重要であるものと考えている。また、遺伝子解析技術の進歩はめざましいが、一方で倫理的側面の重要性も認識されるにいたり、対象者一人一人から厳格なインフォームドコンセントを得る事が求められる様になった。この手続きは非常に時間のかかる地道なものであり、私たちの調査でも1回の説明では十数名前後を対象として、それぞれ約30分の説明時間を必要とした。わが国でも大規模ゲノムコホートの設立の必要性が叫ばれているが、病院ベースではなく、特に地域住民を対象としたコホートの設立とその維持は容易なものではない。

## 果物・野菜摂取の生体指標と乳がんリスクについて



栗木 清典

静岡県立大学 食品栄養科学部 公衆衛生学研究室(大学院兼務)

World Cancer Research Fund/American Institute for Cancer Researchの第1報“Food, Nutrition and the Prevention of Cancer: a

global perspective”(1997年)では、果物・野菜摂取は、乳がんの“probable”な予防要因であったが、“Physical Activity”を加えた第2報(2007年)

では、“limited / no conclusion”となった。これからの栄養疫学研究は、従来の食事調査に生体指を加えた検討、例えば、血清中の総カロテノイドや総トコフェロールの濃度を果物・野菜摂取の生体指標とした検討も必要と考える。

ここでは、2008年にフランス国立衛生・医学研究所に属するがんセンターに1年間留学した際に従事した研究を紹介します。その研究は、ヨーロッパ10カ国で実施しているEuropean Prospective Investigation into Cancer and Nutrition (EPIC) studyの

一部で、10万のフランス人女性を対象に食物・栄養素摂取と健康事象との関連を長期追跡するコーホート研究です。食事調査と血液試料の提供に協力した約2.5万人のうち、7年間の追跡中に乳がんを罹患した366人を症例群、年齢などをマッチした720人を対照群としたコーホート内症例・対照研究を実施した。血清中の総カロテノイド濃度の低濃度に対する高濃度（五分位）のオッズ比（95%信頼区間）は0.74（0.47-1.16、p for trend 0.38）、総トコフェロール濃度では0.68（0.41-1.10、p for trend 0.26）であった。

有意な負の関連は認められなかったものの、リスクが低くなる傾向がみら

れたことから、生体指標を用いた検討の必要性が示された。わが国との比較には、統一した研究計画書の作成や費用など多くの問題がある。したがって、将来、これらの問題を解決した国際栄養疫学研究を展開したいと考えています。



参考文献

Maillard V, Kuriki K, Lefebvre B, et al. Serum carotenoid, tocopherol and retinol concentrations and breast cancer risk in the E3N-EPIC Study. *Int J Cancer* 2010; 127: 1188-96.

## イソフラボン摂取と乳がんリスクとの関連：症例対照研究における量反応関係の検討



岩崎 基

(独)国立がん研究センターがん予防・検診研究センター予防研究部

大豆イソフラボンは細胞・動物実験で抗エストロゲン作用を示し、乳がんに対する予防効果が示されている一方、状況によりリスクを上げる可能性も指摘されています。したがって、疫学研究では、単なる関連性の有無に加えて、量反応関係まで踏み込んだ検討が求められます。

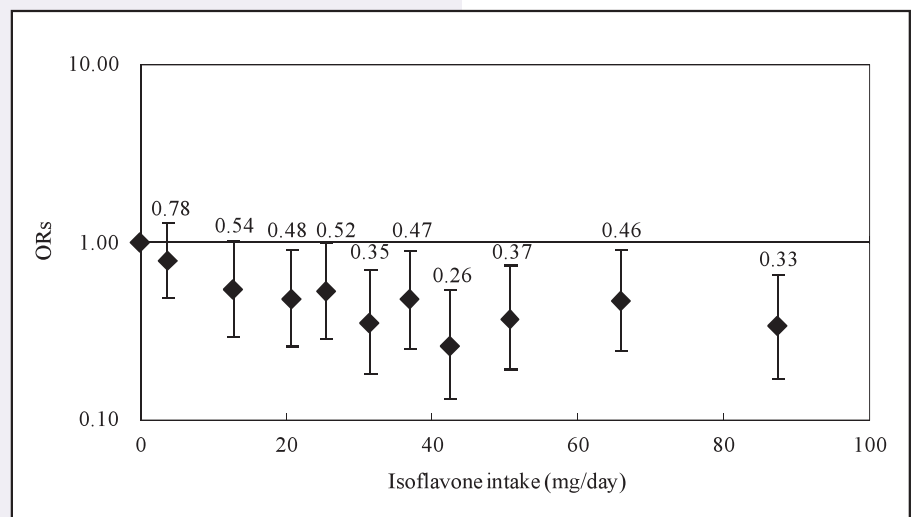
そこで、長野県とブラジルサンパウロ州で行った病院ベースの乳がん症例対照研究のデータを用いて、イソフラボンの摂取量が多い日本人（1日平均46.1mg）390組、中等量の日系人（1日平均24.9mg）81組、少ない非日系人（1日平均4.4mg）379組の3集団において乳がんリスクとの関連を検討しました（Iwasaki M et al. *Breast Cancer Res Treat* 2009; 116: 401-11）。その結果、日系人および非日系人の間では摂取量が多い群でのリスク低下が観察されましたが、日本人の間では有意なリスク低下は見られませんでした。

た。さらに3集団を合わせた解析では、20-30mg くらいまではリスク低下が見られました、それ以上摂取量が増えて

も更なるリスク低下は見られませんでした（図）。

この結果を解釈する上では、研究デザインに起因する選択バイアスや思い出しバイアス、また調査方法の違いによる誤分類の可能性を考慮しなくてはなりません。その確認には、今後、摂取量が異なる集団の前向き研究において、標準化した曝露評価（血中レベルを分析、質問票の違いを校正した摂取量など）を用いてそうした影響を小さくするような研究が必要です。

図 イソフラボン摂取量と乳がんリスクとの関連



20 - 74 歳の日本人、サンパウロ州在住日系人および非日系人女性を対象とした乳がん症例対照研究（850 組）において、イソフラボンを全く摂取しない群を基準とし、摂取量に基づき十分位に分けた各群について調整済みオッズ比と 95%信頼区間を算出した。

## COST OF CANCER



濃沼 信夫

東北大学大学院医学系研究科

がんの医療費は、2兆6,958億円である(2007年度)。これが国民医療費、一般診療医療費に占める割合は各7.9%、10.5%である。最近のがん医療費の伸びは、国民医療費の伸びの2倍を超える。医療費については、多くの医療提供者がもっと増やすべきとしているのに対し、財政当局は適切に抑制すべきとして、両者の主張は真っ向対立する。世論も、この相反する意見で二分される。

一方、がんに罹患することによって生じる経済的損失(がんの医療費を含む)については、これは少ない方がよいという意見に異論はないであろう。国民の2人に1人ががん罹患するとされる今日、その損失は、個人としても社会にとっても、大きなものに違いない。がんの治療や予防活動は、この大きな経済損失を最小化する壮大な闘いともいえる。その役割は、過小に評価されてはならない。

では、がん罹患による経済的損失(cost of cancer)、すなわち、本来得られるはずの生産性(賃金稼得額)の経済的損失は、どの程度なのであろうか。これは、国民医療費に計上される直接医療費に、入院や通院による労働生産性の低下(morbidity cost)、平均余命よりも早死にすることによる逸失利益(mortality cost)などの間接費用を加えたものである。

死の恐怖、人間関係や生きがいの変化に伴う苦痛など、がん罹患には精神的な損失も少なくない。これを貨幣換算して間接費用に加えることもあるが、換算が容易でないこと、個人差が大きいことなどの理由から、加算しない方が安全である。高速道路の渋滞に

よる経済的損失の算定などでは、イライラや疲労による仕事への影響など、精神的な損失が加えられるのが一般的である。これにより損失額は大幅に膨らみ、渋滞による莫大な経済的損失を減らすため、高速道路の整備を強力に進めるべきとのアピール性が増す。

人口動態調査、国民医療費、患者調査、国勢調査、労働力調査などの諸統計を用いて、わが国のcost of cancerを試算すると、年間9兆6,822億円(2005年度)となる。すなわち、直接医療費2兆5,748億円に、入院のmorbidity cost4,182億円、通院のmorbidity cost1,275億円、早期死亡のmortality cost6兆5,617億円を加えたものである。cost of cancer9.6兆円は、GDP(国内総生産)の2%に匹敵する巨額である。

部位別にみると、肺がんは、直接医療費3,046億円、morbidity cost708億円、mortality cost1兆2,019億円で、合計1兆5,773億円となり、最も高額である。胃がんは、各3,191億円、722億円、9,909億円で、合計1兆3,822億円、また、大腸がんは、各3,671億円、760億円、7,948億円で、合計1兆2,379億円である。なお、部位別の(直接)医療費は、厚生労働省の国民医療費には公表されていないので、患者調査、社会医療診察行為別調査により推計した。

米国のcost of cancer(2008年)は、2,281億ドル(約21兆円)と推計されている。内訳は、医療費932億ドル、morbidity cost188億ドル、mortality cost1,161億ドルである。医療制度の違い、最近の円高・ドル安傾向による為替の変化などで単純な比較はできな

いが、米国のcost of cancerはわが国のほぼ2倍の水準にある。

わが国の場合、cost of cancerに占めるmortality costの割合は、全部位で68%であり、部位別では、肺がん76%、胃がん72%、乳がん56%などである。肺がんや胃がんの早期死亡による逸失利益は大きく、生存率の更なる向上、胃がんでいえば、特に59歳以下の若年患者の救命が課題であることが、医療経済の観点からもうかがえる。

米国におけるがんのmortality costは、2020年に1,476億ドルに達すると予測され、肺、大腸、乳房、膵臓、脳の各がん、および白血病の死亡率を年間1%減少させることができれば、経済損失を年間8億1,400万ドル削減できるとの推計がある。

cost of cancerは、がん医療の経済評価に用いられるとともに、がん予防とがん医療の意義について国民の理解と意識を高めるのに有用である。また、効果的、効率的な政策決定と資源配分を促し、がん医療に必要な財源を確保する上で威力を発揮する。とりわけ、がん対策基本法に謳われた、国家としてがん対策を強力に推進する根拠を明示するものである。

すなわち、cost of cancerは、政策決定において、がん対策に優先的に多くの資源配分を行うことの合理的な根拠ともなる。すなわち、同様の方法で、他の疾病について経済的損失(cost of disease)を試算すると、心疾患3兆5,797億円、脳血管疾患1兆7,954億円、糖尿病1兆1,166億円、自殺1兆6,451億円などとなり、がんの経済的損失が最も多いことがわかる。

がんの逸失利益、とりわけ早期死亡による逸失利益は、心疾患、脳血管疾患と比較してみても、群を抜いて多い。がん対策推進基本計画(2007年)で示された、がんによる死亡者の減少(75歳未満の年齢調整死亡率の20%減少)という目標(10年以内)の達成は、必要性も緊急性も極めて高いといえる。

# 平成 22 年 日本がん予防学会 評議員会議事要旨

## 1. 開催日時

平成 22 年 7 月 16 日 (金)  
13:10 ~ 13:40

## 2. 開催場所

北海道大学学術交流会館 講堂  
(北海道札幌市)

## 3. 出席状況

出席 23 名、委任状出席 33 名

## 4. 議案の審議状況および議決の結果

浅香正博会長(北海道大学大学院医学研究科教授)が開会を宣言。本日の出席は出席者 23 名、委任状出席 33 名で定足数を満たしている旨の紹介があった。

### (1) 平成 21 年事業報告、決算報告の承認

議事に入り、まずは事務局より事業報告がなされた。次いで決算報告がなされ、若林敬二監事(静岡県立大学客員教授)から適正に処理されている旨の監査報告があり、原案通り承認された。

### (2) 平成 22 年予算案

原案通り承認された。

### (3) 平成 23 年暫定予算案

原案通り承認された。

### (4) 第 19 回会長の選任

次々期(第 19 回、平成 24 年)会長の選任について、会長推薦の経緯について、慣例として現会長、前会長、次期会長の 3 名が主体となって検討していただき推薦者を決めているとの慣例が事務局から説明された。

次々年度の会長候補者について浅香会長

から立候補の有無が問われたが、立候補者はなかったため、田中卓二氏(東海細胞研究所所長)が推薦され、承諾された。

### (5) 将来計画検討委員会(仮称)について

浅香会長より当学会の今後の在り方について、検討するべく「将来計画検討委員会(仮称)」を設置してはどうかの提案がなされ、承認された。委員会メンバーは、現会長、前会長、次期会長の 3 名のほか数名で構成したい。検討課題としては学会の法人化、次々期会長の選任方法などを検討し、委員会の正式名称も決めることとした。なお、追加の委員については現会長の浅香氏に一任することで承認された。

### (6) 評議員の追加について

事務局に事前に推薦された 3 名について、浅香会長から簡単な略歴の紹介があり、森満氏(札幌医科大学医学部教授)、岡田太氏(鳥取大学医学部教授)、溝上哲也氏(国立国際医療研究センター部長)の 3 氏が推薦され、各々承認された。

## 5. 報告・協議事項

### (1) 第 18 回(平成 23 年)学会準備状況

次年度会長酒井敏行氏(京都府立医科大学医学研究科教授)から次年度学会の準備状況について説明がなされた。第 18 回予防学会は平成 23 年 6 月 20 日(月)~21 日(火)の両日、京都府立医科大学広小路キャンパス(京都府京都市)にて、日本がん疫学・分子疫学研究学会との合同にて開催すべく準備が進行中であるとの報告がなされた。

### (2) その他

① 新評議員の推薦について、昨年の世

話人会で評議員へ推薦したい方がいるときは事前に会長あるいは事務局へ略歴書の提出をお願いしたいとの話が出ていたこと。今後、推薦用の略歴のフォーマットを事務局で用意してもらうので、そちらを利用して欲しいとの紹介が会長よりなされた。

② 森秀樹氏から『ナノ化合物』や『アスベスト』について日本は遅れ気味であること。この学会が何らかのミッションを世に出してもよいのではないかと、若林敬二氏から「韓国・中国などアジア諸国との連携も視野に入れてアピールをしておく必要があるのではないか」、津田洋幸氏から「学会の活動を社会に発信するため、ホームページを充実させ、情報発信をしておく必要がある」との提案がなされた。いずれも将来計画検討委員会(仮称)での検討課題とした。

以上をもって議案全部の審議を終了したので、13 時 40 分浅香正博会長が閉会を宣言し、終了した。

## 付記

評議員会・総会で会長一任の決議をいただいた「将来計画検討委員会(仮称)」の委員につき、評議員会・総会で承認をいただいた浅香正博氏(北海道大学、現会長)、酒井敏行氏(京都府立医科大学、次期会長)、白井智之氏(名古屋市立大学、前会長)のほか、細川眞澄男氏(北海道大学名誉教授)、若林敬二氏(静岡県立大学)、津金昌一郎氏(国立がん研究センター)、田島和雄氏(愛知県がんセンター)の計 7 名を委嘱した。

## 平成 21 年事業報告

(平成 21 年 1 月 1 日~平成 21 年 12 月 31 日)

### 1. 学術会議開催事業

会則第 4 条 1 項及び第 22 条に掲げる事業は次の通り行った。

#### ① 第 16 回日本がん予防学会

平成 21 年 6 月 16 日(火)、17 日(水)の両日、愛知県がんセンター国際医学交流センター(名古屋市)にて第 16 回学会(会長・白井智之 名古屋市立大学大学院医学研究科教授)を開催、約 250 名が参加した。

「予防の容易ながん困難ながん」を主課題とし、初日は国際シンポジウム、招へい講演、ワークショップ、合同シンポジウム、特別講演。2 日目はワークショップ、

招へい講演、合同シンポジウムが行われ最新の研究成果が発表された。

#### ② 世話人会・総会

平成 21 年 6 月 17 日(水)、愛知県がんセンター北館にて開催。出席者 33 名。

- ・平成 20 年事業・決算報告、平成 21 年予算、平成 22 年暫定予算の承認
- ・平成 23 年(第 18 回)会長に酒井敏行氏(京都府立医科大学大学院医学研究科教授)を選任
- ・世話人会から評議員会への名称変更、それに伴う会則の変更、評議員の追加、監事・ニュースレター編集委員の交代などを承認

### 2. 会報発行事業

会則第 4 条 4 項に掲げる事業は次の通り

行った。

#### ① NEWS LETTER No.59 (Mar.)

「がん検診の受診率を上げるには(辻一郎先生)」など 7 編を掲載

(編集委員 浜島信之氏)

#### ② NEWS LETTER No.60 (Jun.)

「癌転移に対する挑戦と癌予防に思うことなど(佐佐重豊先生)」など 10 編を掲載

(編集委員 細川眞澄男氏)

#### ③ NEWS LETTER No.61 (Sep.)

「がん予防大会 2009 愛知を終えて(白井智之先生)」など 11 編を掲載

(編集委員 大澤俊彦氏)

#### ④ NEWS LETTER No.62 (Dec.)

「がんリスク要因解明のためのコホート研究:雑感(玉腰暁子先生)」など 6 編を掲載

(編集委員 酒井敏行氏)

## 平成21年収支決算書

(平成21年1月1日から平成21年12月31日まで)

### \* 収入の部

科目	予算額	決算額
会費収入	1,996,000円	1,883,000円
賛助会費収入	900,000円	800,000円
雑収入	4,000円	2,283円
当期収入合計	2,900,000円	2,685,283円
前期繰越金	4,421,864円	4,421,864円
合計	7,321,864円	7,107,147円

### \* 支出の部

科目	予算額	決算額
会報製作費	430,000円	327,705円
印刷費	200,000円	94,605円
補助金	500,000円	500,000円
通信費	350,000円	172,267円
消耗品	50,000円	7,263円
旅費交通費	100,000円	120,280円
事務局謝金	360,000円	360,000円
賃借費	548,000円	547,940円
雑費	70,000円	58,880円
予備費	4,713,864円	0円
合計	7,321,864円	2,188,940円

\* 次期繰越金  
(収入7,107,147円-支出2,188,940円)  
=4,918,207円

## 平成22年収支予算書

(平成22年1月1日から平成22年12月31日まで)

### \* 収入の部

科目	予算額	前年予算額
会費収入	1,488,000円	1,996,000円
賛助会費収入	900,000円	900,000円
雑収入	2,000円	4,000円
当期収入合計	2,390,000円	2,900,000円
前期繰越金	4,918,207円	4,421,864円
合計	7,308,207円	7,321,864円

### \* 支出の部

科目	予算額	前年予算額
会報製作費	430,000円	430,000円
印刷費	200,000円	200,000円
補助金	500,000円	500,000円
通信費	350,000円	350,000円
消耗品	50,000円	50,000円
旅費交通費	0円	100,000円
事務局謝金	360,000円	360,000円
賃借費	548,000円	548,000円
雑費	70,000円	70,000円
予備費	4,800,207円	4,713,864円
合計	7,308,207円	7,321,864円

## 平成23年暫定収支予算書

(平成23年1月1日から平成23年12月31日まで)

### \* 収入の部

科目	暫定予算額	H22年予算額
会費収入	1,488,000円	1,488,000円
賛助会費収入	900,000円	900,000円
雑収入	2,000円	2,000円
当期収入合計	2,390,000円	2,390,000円
前期繰越金	4,800,000円	4,918,207円
合計	7,190,000円	7,308,207円

### \* 支出の部

科目	暫定予算額	H22年予算額
会報製作費	430,000円	430,000円
印刷費	200,000円	200,000円
補助金	500,000円	500,000円
通信費	350,000円	350,000円
消耗品	50,000円	50,000円
旅費交通費	100,000円	0円
事務局謝金	360,000円	360,000円
賃借費	548,000円	548,000円
雑費	70,000円	70,000円
予備費	4,582,000円	4,800,207円
合計	7,190,000円	7,308,207円

\* 前期繰越金、予備費、合計額は平成22年収支決算後に確定

## 第18回 日本がん予防学会 開催案内

テーマ: **がんの罹患率と死亡率  
の激減**

—効果的/革新的なが  
ん予防法を用いて—

会期: 平成23年(2011年)  
**6月20日(月)~21日(火)**

会場: **京都府立医科大学  
広小路キャンパス**  
(京都府京都市)

会長: **酒井 敏行先生**  
(京都府立医科大学大学  
院医学研究科 教授)

### <編集後記>

「第17回日本がん予防学会」が浅香正博先生を会長として、7月15-16日に札幌市の北海道大学学術交流会館で盛大に開催されました。その様子を浅香先生にまずご紹介いただきました。ご紹介にありますように本学術大会のメインテーマは「がんの予防: 基礎・臨床・疫学の垣根を越えて」で、これにふさわしく多くの基礎・臨床・疫学の研究者が参加し、胃がん、女性ホルモン依存性がん、ナノ粒子、米由来物質について活発な発表討議が行われました。ピロリ菌除菌による胃がん予防方法の確立は、基礎研究・臨床研究・疫学研究が結実したものであり、今回の学術大会にふさわしいテーマでした。ピロリ菌除菌による胃がん予防は、HPV 予防接種による子宮頸がん予防よりも安価で効果の大きいがん予防方法ですので、今後更に広める必要があ

ると思われます。本 NEWS LETTER には、ご多忙のところ、浅香先生のほか、7名の先生方に最近の知見についてご紹介頂きました。ここに感謝申し上げます。(浜島信之)

### 発行

Japanese Association for Cancer Prevention  
日本がん予防学会

### 会長

浅香 正博  
(北海道大学大学院医学研究科教授)

### 編集委員(※本号担当者)

大東 肇 西川 秋佳  
酒井 敏行 ※浜島 信之  
中江 大 細川真澄男  
(50音順)

### 事務局

札幌市中央区大通西6 北海道医師会館内  
TEL:011-241-4550 FAX:011-222-1526  
E-mail:master@jacp.info  
URL:http://jacp.info/

問い合わせ、入会のご希望などは事務局へ  
(担当:小林博・及川智江)